【投　稿】

アニマルウェルフェア オンラインシンポジウムの 開催報告

奥　野　尚　志
（一般社団法人アニマルウェルフェア畜産協会）

2021年５月29日（土）、北海道獣医師会の後援を得て、オンラインシンポジウムを開催しました。76名の参加があり、演者講演後にも活発な意見交換が行われました。ここに改めて、獣医師会へお礼申し上げるとともに、養鶏について話を聞く機会も少ないことから、「日本のアニマルウェルフェア（AW）はどこにいく？」の概要を報告します。ご意見などをお寄せいただければ幸いです。

１.「世界と日本、鶏のAWとは？」

新村　毅氏　東京農工大学准教授

１）AWの概念と捉え方

AWとアニマルライツ（AR）は違います。ARは動物の権利を認め、動物（家畜）の利用を認めず、ペットを飼うことも認めない考えもあります。それに対し、AWでは動物（家畜）の利用を認めるが、生存中、命ある限りはその生活の質を高めるという考えです。養鶏に限らず畜産全般にわたり、集約的工場型畜産に批判が集中しています。現在の生産システムが効率重視であり、家畜や家禽に多くの苦痛を強いているということが問題となっています。

２）ブロイラーの問題点

世界的に脚弱が問題となっています。工場型の集約型生産の効率重視の品種改良の結果、早期成長を目的としたために、骨格と筋肉の成長バランスがとれないことが原因と考えられています。これを防ぐためにスローイング、緩やかに骨と肉のバランスのとれた健康な鶏を育成するという方策がEUなどでは取り入れられています。またAW的配慮から点灯プログラムを導入し、従来型の常時点灯ではなく数時間の暗期（消灯）を設ける対策がとられつつあります。

３）採卵鶏

出生直後の雄ヒヨコの殺処分方法として、苦痛を軽減するための措置を取り入れた安楽殺を実施しているのかどうかが問われています。EUでは二酸化炭素ガスによる安楽殺が行われているようです。ドイツでは雄ビナをブロイラーのように産肉鶏として飼養する方策もとられていますが、技術的に難しいようです。もうひとつとして、孵化前、卵の段階で雌雄判別して雌だけを残すという方策があり、EUではこの方法が主流になりつつあるということです。

尻つつき（カリバニズム）の防止のために、採卵鶏ではビークトリミング（断嘴）が実施されています。実施するにあたり、痛みを軽減する手法が必要です。また採卵鶏では産卵率が低下すると強制換羽をすることがあります。その方法として従来は絶食絶水をしていましたが、栄養価の低い飼料を与えることで飢えの苦痛から解放するという方策が取り入れられるようになったようです。

日本では卵の生食が根付いていることから、諸外国より高い衛生管理が要求され、バタリーケージはその点からは理に適っていますが、AWの観点からは砂遊び、採卵前の行動、止まり木行動等の行動欲求を強く抑制していて、強いストレスを受けていると考えられます。

４）世界の動向

EUを主とする欧米と比較すると、日本を含むアジアやアフリカ諸国では、その進行浸透が鈍いです。OIEは家畜家禽の飼養管理や輸送、屠畜などについて順次科学的根拠に基づいたガイドラインを策定し、世界基準とされています。AW畜産への関心度が高いヨーロッパではその起点は社会的問題として取り上げられたことに端を発し、法的規制による飼養管理改善が進行しました。採卵養鶏に関してEUでは2012年バタリーケージが禁止され、現状採卵鶏ではエンリッチドケージと放飼（ケージフリー）が半ばで、ケージフリーに移行しつつあります。

採卵鶏の飼養管理システムには生産性（経済性）、卵の衛生面、鶏の行動などから、それぞれ利点、欠点があります。コストの面から考えると、エンリッチドケージ、ケージフリーへの移行に伴って高くなりますが、消費者の理解が欠かせません。約10年前のアンケート調査によると、ヨーロッパでは約７割の人たちが飼養現場に行ったことがあり、６割の消費者は価格が高くてもAWに配慮した卵なら購入するという回答でした。

USAでは各州の州法によって規制されていて、州によってはケージ使用が禁止されている、もしくは近い将来禁止されるという法律が制定されています。中でもカリフォルニア州では、ケージでの生産のみならず他州から移入しての販売も禁止されています。マクドナルド、ウォルマート、コストコ、ヒルトンなどのグローバル企業（多国籍企業）の動向が大きな影響力を持ちつつあり、

AWは企業価値を左右する大きな要素と捉えられていています。また投資家の視点からはAWが企業評価基準のひとつの要素と捉えられつつあります。

日本では畜産技術協会によってOIE基準に準拠して作成されたガイドラインが農水省で公にされていますが、EUやUSAのような罰則規定はありません。2011年に環境省が実施した消費者アンケートによると８割以上の方がAWという言葉を知らない、12.5%が言葉は知っているがその内容については知らないという回答でした。また生産者への聞き取りから採卵鶏農場の９割以上がバタリーケージ飼養であることがわかりました。

５）歩む道は

短期的には認証制度による情報の非対称性の解消、生産物の差別化による消費者の購買促進へと結びつくと考えられます。SDGsの観点から、家畜へのAW的配慮→家畜の健康向上・畜産物品質の向上→人の健康への寄与、突き詰めるところ地球の健康という一連の流れが成立します。

世界には大規模工場型畜産の象徴でもあったケージ飼養からケージフリーへの急激な移行が既に始まっています。一方、日本では生卵を食べるという食文化があり、ケージ飼いを取り入れた高度な衛生管理が求め続けられますが、畜産においてAWの考慮は不可避であり、経営との兼ね合いを模索することが求められます。

２.「にわとりの幸せは、私の幸せ：丸一養鶏場の取り組みの事例と課題」

一柳憲隆氏　(有)丸一養鶏場　代表取締役

１）丸一養鶏場の概要

昭和45年埼玉県寄居町にて創業し、現在はインラインGPセンターを併設し、自家配合による飼養を行っています。飼養総羽数は18万羽、うち通常のバタリーケージ飼養は16万羽、エイビアリーシステム飼養は２万羽です。少しずつエイビアリー鶏舎を増やしています。

２）エイビアリーシステムの導入

AWに取り組むきっかけは、EUではバタリーケージ飼養からの脱却の動きがあり、2012年からはバタリーケージ飼養そのものが禁止になるという規定が制定されたことです。また1996年にスイスを視察した際に、既にEUに先駆けてバタリーケージ禁止となった厳しいルールの下で、直立多段式による平飼い＝エイビアリーシステムによる飼育を行っているという現場を知りました。2000年にヨーロッパでの展示会視察時にエイビアリーシステムについて、日本でも導入可能ではないかと肌で感じました。何よりも、子供の頃からの体験として、人間が近づくと鶏が落ち着かない、これが当たり前のこととして思っていましたが、エイビアリーシステムでは鶏が足元に寄って来るのです。寄ってくるなんて考えられませんでした。設備の面からだけではなくAWに取り組む最大のきっかけは、今までの常識を覆すこの衝撃的なできごとでした。そこで、2002年にエイビアリーシステムの導入を決定し、2006年に最初の新しい鶏舎が完成しました。従来型ケージでは鶏と糞の接触がなく、鶏体が汚れない、卵と糞の接触がなく衛生管理が可能であり、卵を確実に回収できるという利点があります。また労働面から少人数で管理でき、鶏舎内で多羽数の飼養が可能です。しかし、産卵場所、止まり木行動、砂遊びやついばみ、羽を広げるなどの鶏の習性、行動の発現を抑制しています。一方、エイビアリーシステムでは屋外と連動したエリア、摂食・摂水エリアがあります。鶏の休息時に危険を回避するという習性に適った止まり木もあります。しかし、巣箱はあるものの、100%そこに産卵するとは限らないことと、敷料にモミガラやチップを使うとホコリによる呼吸気系疾病の発生も負の面として考えられます。今後も観察を続け、行動学的な観点から勉強、改善を模索する必要があると思っています。AWに取り組み、エイビアリーシステムを導入してみて初めて気づかされたことが沢山あり、その一環として鶏に限らずAWの勉強のチャンスがあれば、できうる限り活かして積極的に取り組んでいます。

エイビアリーシステムで足元に群がる鶏たち

３）畜産物に求められるもの

畜産物には当然ながら安全性も求められます。AWに配慮しているから安全なのか、AWの視点からだけでいいのかというと、そうではありません。とりわけ、鶏卵に関しては日本では生食文化があり、より高度な衛生管理を考慮した採卵養鶏が求められています。例えば、サルモネラ食中毒は時には人命さえ奪います。平飼い飼育

では従来型ケージと比較して鶏と糞、卵と糞の接触リスクが高いため、卵への汚染リスクも上がります。また、同様の接触リスクにより鶏の病気であるコクシジウム症が発生して、大きな被害を受けたという農家もあることから、HACCPによる食品安全マネジメントシステムを活用しながら、AWとの両輪として飼養管理、経営をしていかなければなりません。

3．質疑応答・・・・新村氏と一柳氏の回答から

1）ケージフリーと疾病について

平飼い・放牧の明確な言葉による形態分別の定義はなく、放牧には屋外運動場が設けられています。EUでは1羽当たりの飼養面積が定義されているが、日本では定められたものがなく、またエイビアリーシステムと言っても消費者にはなかなか伝わらないのが現状です。AWと疾病の関係ですが、放牧によってストレスが軽減され免疫機能が向上し、健康的な状態だと病気への耐性が増しますが、高病原性鳥インフルエンザウイルスなどの新興ウィルス耐性とは関係ありません。むしろ放牧では高病原性鳥インフルエンザには注意を払うべきです。日本ではケージ飼育で発生していて、一概に飼養形態と結びつけて考えることはできなく、AWと高病原性鳥インフルエンザとは別問題としてとらえるべきでしょう。

2）ビークトリミングについて

敵対行動をなくすということから、ケージ飼育ではデビークは不可欠となっています。デビークについて2つの方策が考えられます。まずひとつはデビークをしなくても敵対行動が少なくなる飼養環境の工夫、それとデビーク技術を改良することによって、ストレスを軽減する方策があります。丸一養鶏ではストレスを軽減するために赤外線照射による処理を採用していて、約2週間で目的を達成することができます。またエイビアリー鶏舎では他の多くの鶏から攻撃対象となる可能性があり、デビークは必要です。

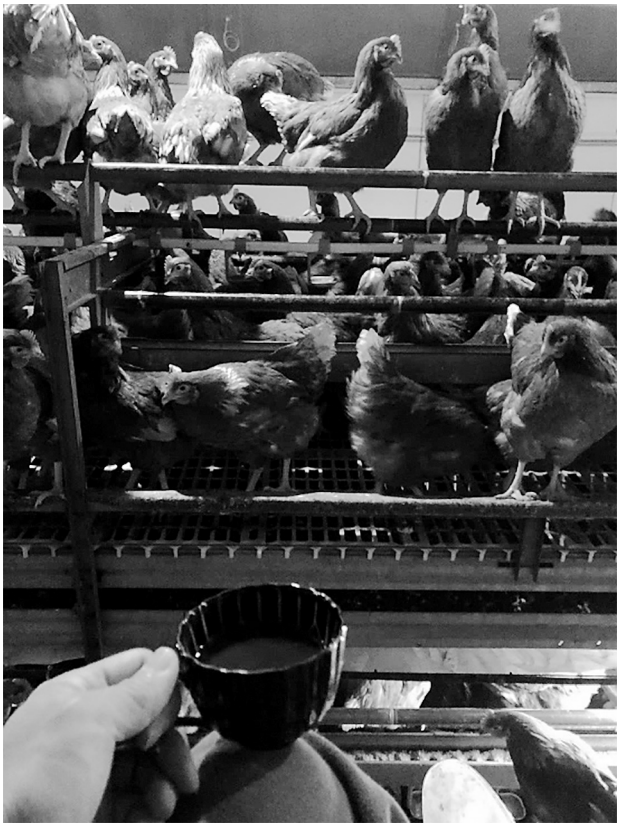
3）卵の品質とAWとの関連

飼養形態によって卵の品質・含有成分が変化することが分かりつつあるが、品質・成分は餌からの影響を最も反映します。ケージ飼いしかない頃には商品の差別化として、スーパーではビタミン等の含有物を表示していました。近年、消費者の飼養管理への関心の高まりからAW観点商品の選択肢も増えてきました。

4）日本でケージフリーは進むのか？（鶏におけるAW展望）

日本の鶏卵事情として、卵の低価格での販売が定着していることから、経営面から生産コストを極力削減しなければならないという使命を背負っています。社会的にも生産現場、飼養形態についての関心度が低いこと、そもそもAWについて知る人、関心を寄せる人が少ないために、生産者へのAWに取り組むという動機付けには至っていません。また、安価で良質、安心して食することのできる卵が巷にあふれていて、消費者には当たり前のこととなっています。しかし、中長期的な視点から教育の中で意識変革を促すことによって、SDGsやエシカルなどを含めAWに関心を寄せる消費者が増えるのではないでしょうか。AWに配慮した商品が店頭に並ぶ、そしてその品数が増えていく、消費者の選択肢が増え、価格に対する理解も深まっていきます。そのことが鶏をより鶏として、命ある生きものとして扱うことの生産者へのインセンティブにもなります。少しずつでも声をあげていくことが大事です。

この思いは、従来のバタリーケージでは味わえなかった充足感をエイビアリーシステムがもたらしてくれたようです。鶏舎の中で腰を掛け、コーヒーカップを傾ける。そして、鶏のしぐさを眺めながらゆっくりとした時の流れに身を任せること、ニワトリを生業とする者だけが許される至福の時かもしれません。



にわとりの幸せは私の幸せ